



## 論文誌編集委員会

### ヒューマンインタフェース学会

#### 論文誌編集委員会委員長（担当理事） 井野 秀一

ヒューマンインタフェース学会の常設委員会規程によれば、論文誌編集委員会の役割は「論文誌への投稿論文の査読および編集に関する会務を取り扱うこと」にあります。現在、その任務遂行のために、総勢 37 名に及ぶメンバーによって本委員会を運営しています。また、委員構成は、本学会の特徴である「人と技術の関わりに関する総合的な学術分野」という性格を反映させるべく、理工系・人文系、大学・国研・企業（フリーランスを含む）、若手・中堅・ベテラン、ジェンダー、地域ブロックなどの様々な視点を含めたものとなっています。

この多様性に富んだ委員構成は、年 4 回定期刊行する論文誌の特集号の企画・立案に大いに威力を発揮します。例えば、今年度の場合、春の論文誌編集委員会において「高齢者」「感性」「生理・心理・メンタル」「社会・サービス」「交通・移動」をキーワードとするヒューマンインタフェース研究に関する特集号の独自のアイデアが新任委員を中心に 15 件以上も提案されました。ここでは、委員同士の深掘りのディスカッションと共に、関連性のある複数のアイデアを異なる視点を交えて融合し、斬新かつタイムリーな新企画に練り上げるチーム作業への橋渡しをしました。このチームは 3 名程度の編集委員で構成され、「理工系×人文系」「大学×企業」「若手×ベテラン」などの多様性を高める掛け算の関係性を意識しています。加えて、新しい試みとしては、HI シンポジウム実行委員会との連携により、「シンポジウム特集号」（小特集）を企画しました。シンポジウムで発表されたダイヤモンドの原石のような研究を積極的に掘り上げて育てていく発想です。なお、特集号では、上記の（常設）編集委員以外のメンバーを加えて、テーマ毎に独立した特集号編集委員会を組織し、査読・編集および論文賞候補の推薦などを行います。

これらの毎号の特集企画と共に、編集委員にとって重要な任務は、会員等から投稿された一般論文に対する迅速な査読と編集作業です。ご存じのように本学会では、メタレビューア制と「条件付採録」判定制度を採用しています。大概、査読者 2 名の判定結果は共通しますが、時として大きく異なる場合があります。そのようなケースでは、担当編集委員がメタレビューアとして最終判断を下すことが求められます。そこでの判断は、「信頼性」のあることは大前提ですが、「新規性」と「有用性」については減点主義でなく「加点主義」を旨とし、百点満点でなくても 60 点以上であれば採録を前向きに検討し、将来のヒューマンインタフェース研究の発展に資する可能性を秘めた論文を出来るだけ取りこぼさない方針で臨んでいます。（同様な議論は他学会でもあり、電子情報通信学会と情報処理学会では「石を捨てることはあっても玉を捨てることなかれ」という査読ポリシーを掲げています。）そのためにも、共著者の方々には、投稿前に第一著者と共に論文体裁等の確認を必ず行っていただきたいと思います。

さらに、会員にとって魅力ある論文誌づくりの一環として今期の編集委員会で検討している事項に、論文のマルチメディア化、査読投稿システムと公開方法（国内外サイトとのリンク）の電子システム化が挙げられます。前者は、昨年度からの継続審議の案件であり、論文の電子化が進む現在では動画コンテンツなどの埋込は技術的には可能である一方で、その著作権や真贋判定などの運用面における諸課題も見えてきています。そのため、本件に関してはワーキンググループを立ち上げて丹念に進めていくことになりました。後者では、インターネットのウェブ上からの論文投稿の電子受付、査読・編集作業のオンライン化、判定結果の迅速伝達、そして国内外の電子ジャーナルサイトとのリンクによる論文公開などが挙げられます。論文媒体のマルチメディア化と共に、その実現には越えるべきハードルがありますが、本学会に投稿・掲載された貴重な研究成果を逸速く世界に向けて発信していく取り組みとして積極推進したく考えています。なお、英文で投稿・掲載された論文の場合には、情報処理学会や人工知能学会などの国内 6 学会で編集・運営するジャーナルである“Information and Media Technologies”を通じて国内外に広く発信されています。

今期の編集委員会は本格始動して数ヶ月ですが、ボランティア精神とポジティブマインドの編集委員のチームでの協力体制の下に、様々な取り組みをスタートさせました。秋以降には、正会員の皆様からのご推薦に基づく論文賞選考作業も始まります。是非、論文賞候補論文の推薦と共に、ヒューマンインタフェース学会の論文誌をより魅力あるジャーナルに発展させていくアイデアをお近くの編集委員や学会事務局を通じて気軽にお知らせ下さい。最後に、多様な人間と技術の関わりの研究開発をリードするコミュニティが豊かになる論文誌（学術雑誌）づくりを支える編集委員会でありたいと思っています。